『明治開化 安吾捕物帖』の世界

——民俗学との関連を中心にして——

丸川　浩

一

戦後、「堕落論」や「白痴」によって一躍新文学の旗手となった坂口安吾は、その後、推理小説とルポルタージュという新たな文学活動の領域を切り開いた。

推理小説については、『不連続殺人事件』(昭二二・八～二三・八連載。二三・一二刊行)の発表以後、「能面の秘密」(昭三〇・二)に至るまで断続的に書き続けられ、ルポルタージュについては、『安吾巷談』(昭二五・一～一二)を皮切りに、『安吾新日本地理』(昭二六・一～一二)を経て、急死する直前まで取材に出かけていた『安吾新日本風土記』(昭三〇・二～三)を発表するに至る。ともに、純文学作家の余技的な仕事として看過されがちだが、必ずしもそうではない。いくつかの点で留保は必要だが、これらの仕事は、余技を越えて、戦後の坂口安吾の活動の中で重要な部分を占めていると私は考える。

推理小説にせよ、ルポルタージュにせよ、坂口安吾の試みは、早過ぎた死によって中断させられたのだが、そこには、その先に坂口が発展させたかも知れない様々な可能性が認められる。本稿では、ルポルタージュの問題は暫くおいて、一話完結の推理小説のシリーズ『明治開化 安吾捕物帖』(本稿では、以後『安吾捕物帖』と書く)を中心にして、そのあたりの問題を考えてみたい。

二

『不連続殺人事件』の好評(第二回探偵作家クラブ賞を受賞)以来、「文壇随一の探偵小説通と自他ともに許す存在にまつりあげられてしまった」(「能筆ジム」)という坂口安吾は、昭和二五年一〇月から「小説新潮」に「明治開化 安吾捕物」(単行本刊行時に『明治開化 安吾捕物帖』と改題)の連載を開始する。

『安吾捕物帖』の執筆の様子については、「安吾行状日記」や税金対策ノートに付された「日記」によって伺い知ることが出来る。それによると、『安吾捕物帖』の原稿締切は、発表月の二ケ月前の中旬だったらしく、その構想と執筆に当てられている時間は四日から五日で、「捕物帖の場合には特に筋をたてることが主要な労働であり創作でも

あり、書くことよりもそっちに主点があるものだ」と言い、執筆に当てられる時間は、七十枚の原稿で二十四時間か三十六時間ぐらいだと言っている。流行作家の実態はこのようなものなのかも知れないが、この執筆速度は相当なものである。しかも、これだけの速度で書きながら、『安吾捕物帖』二十話は、全て一定のレベルを越える完成度を示しているのである。なぜ、坂口にそれが可能だったのだろうか。

このことは、作家の集中力というような問題ではなく、坂口安吾の作家的資質に関わる問題である。『吹雪物語』(昭一三・七)の挫折以来、戦後に至っても、坂口安吾は長編小説を書きかけては何度も中絶しているが、『不連続殺人事件』は例外的に完結した長編小説であると言える。『安吾捕物帖』は一話完結のシリーズものなので、長編とは言えないが、量的には『不連続殺人事件』をはるかに凌駕して、第二十話まで書き継がれた。推理小説で未完に終ったのは、「復員殺人事件」(昭二四・八～二五・三)だけで、ただし、これは掲載雑誌が廃刊されたことによる。つまり、推理小説における坂口安吾は、彼が最も力をそそいだと目される本来の純文学的な作品には見られない、構想の貫徹への持続力を発揮しているのである。

このようなことが起こるのは、坂口にとって、推理小説の持つ形式上の制約が、かえってよい方に作用したからだと考えられる。推理小説にもいろいろなタイプがあるのだろうが、事件が起こり、謎が深まり、最終的に謎が明かされるという最低限のプロット上の制約はある。そうした制約が、坂口の場合、しばしば起こる観念の自己増殖による作品の破綻という事態を避けさせたと考えられる。しかも、坂口には、推理小説は「お遊び」であるという意識があり、それが彼にのびやかな自由自在さを与えたことはまず間違いない。

『安吾捕物帖』の連載第四回目の「ああ無情」の巻頭には、「読者への口上」が掲載されていて、そこで坂口は、『安吾捕物帖』の各話の形式について解説している。それによると、全体が五段で構成され、第一段で虎之介が海舟を訪れ、第二段で事件の説明があり、第三段で海舟の推理、第四段で新十郎が犯人を当てて、第五段で海舟が負け惜しみを言うのが、概ねの形式であるということになる。実際は、第十三話「幻の塔」あたりからこの形式はくずれ始めるのだが、ともかく、このように予め形式を確定して置くことによって、坂口は、その形式の枠組みの中で、のびのびと彼自身の固有の関心や興味を、作品の中に盛り込むことが出来たのである。そして、そのことによって、結果的に、『安吾捕物帖』は「お遊び」を超えたユニークな作品世界を持つことになった。

三

『安吾捕物帖』の時代背景は、大まかには明治開化期であるが、第一話「舞踏会殺人事件」の冒頭に書かれているように、「明治十八九年」に設定してある。この時代設定は、第一話の「舞踏会殺人事件」が、鹿鳴館時代の上流階層の舞踏会熱を背景にして書かれなければならなかったことが主な理由だったと考えられるが、それ以後の話も、ほぼこの時代設定を踏襲しているものと考えられる。

そもそも、何故坂口は、『安吾捕物帖』の時代設定を明治開化期に置いたのか、という問題がある。それについては、『安吾史譚』(昭二

七・一～七)の中の「勝夢酔」で、次のように書かれていることが参考になる。

維新後の三十年ぐらいと、今度の敗戦後の七年とは甚だ似ているようだ。敗戦後の日本は外国の占領下だから、明治維新とは違うと考えるのは当たらない。

つまり、坂口は、戦後の世相と明治開化期の世相とを重ね合わせているのである。実際、『安吾捕物帖』の中で、戦後の世相や事件に触発されたと考えられる題材で書かれた話がいくつかある。戦後の新興宗教ブームと関わりを持つ、新興宗教内部の抗争を題材とした第三話「魔教の怪」や、下山事件を話の枕として、鉄道の轢死体の発見が話の発端となる第十二話「愚妖」、荒川放水路バラバラ死体事件に触発を受けたらしい第二十話「トンビ男」などであるが、女相撲が犯行のトリックに使われる第十九話「乞食男爵」の冒頭で、坂口は次のように書いている。

終戦後は諸事解禁で、ストリップ、女相撲は御承知のこと、その他善男善女の立ち入らぬところで何が行われているか、何でもあると思うのが一番手ッとり早くて確実らしいというゴサカンな時世でしたが、明治維新後の十年間ほどもちょうど今と同じように諸事解禁でゴサカンな時世でした。

『安吾捕物帖』の連載開始に先立って、坂口は、昭和二五年一月から『安吾巷談』を連載していたが、ここらあたりの発想には、『安吾巷談』とのつながりを充分予想させるものがある。戦後の世相に対する関心が、坂口に、明治開化期を時代背景とする「捕物帖」を書かせたと、一応考えることは出来るだろう。

尾崎秀樹氏は、「戦後批判としての捕物帖」(〈『坂口安吾全集』第十一巻　一九六九・一　冬樹社刊〉所収)の中で、『安吾捕物帖』の中の勝海舟の役割に注目して、「海舟の言葉を通して、開化期の世相をとらえ、さらに戦後の混沌とした時代相を二重うつしにする配慮ではなかったか」と述べている。明治開化期の世相の概嘆者である勝海舟に、戦後世相の「巷談師」である自己の姿を重ね合わせることによって、戦後批判を行うというモチーフを坂口が持っていたというように尾崎氏は考えているわけである。これは、一応首肯出来る見解であるが、疑問点もある。

それは、海舟の役割が、尾崎氏の言うほど大きな意味を持っているかどうかという疑問である。謎解きという側面では、海舟の推理は、第十二話の「愚妖」の場合を除いて、ほとんど見当はずれに終るのだから、海舟の役割は、「トンマな探偵」の域を出ないだろう。従って、海舟の真の役割は、虎之介から真相を聞かされて、べらんめえ調で負け惜しみを言う部分にあると言わざるを得ないだろう。確かに、この部分は、海舟が、事件の本質を短いことばで言い当てたり、開化期の世相を概嘆してみせたりする部分で、尾崎氏が言うような坂口のモチーフを実現しやすい部分であろう。しかし、ほとんどの場合、それは、話のしめくくり(エピローグ)の意味しか持っておらず、『安吾捕物帖』の世界にとって必要不可欠のものにはなっていない。

事実、海舟の役割は、連載が進むにつれて薄れて行き、第十三話「幻の塔」では、海舟の推理の部分がなくなり、第十六話「家族は六人・目一ツ半」を最後に、海舟は話の中に一切出て来なくなるのである。『安吾史譚』に見られるように、坂口は、勝海舟を、合理精神の

持ち主として高く評価している。政情や上流階層の事情に明るく、下情にも通じて、人間通でもあった海舟を副主人公格に設定することは、『安吾捕物帖』の連載開始当初の構想上、必要であった(あらゆる階層の事件を扱えて、世界が広がる)ことは間違いない。また、そこに、戦後世相と明治開化期の世相を重ね合わせようというモチーフもあったろう。しかし、『安吾捕物帖』の当初のモチーフがそこにあったことは認めるにしても、それを余りに過大視することは、『安吾捕物帖』の世界のもう一つの面を見失わせることになるように、私は思うのである。

戦後世相と重ね合わされた明治開花期の世相が描かれているのが、『安吾捕物帖』の一つの面だとすれば、それは、直接的には『安吾巷談』とつながっている面だろう。そして、私がここで言う、もう一つの面とは、『安吾新日本地理』とつながっている面である。この面では、戦後世相とか明治開花期の世相とかの時代的なものに限定されない世界が描かれていると言えるのである。

そういう見方に立つ時に、花田清輝の「捕物帳を愛するゆえん」(昭三一・一一)というエッセイは重要である。花田は、第八話の「時計館の秘密」の貧民窟のくだりに触れ、「転形期のプロレタリアートの生態が、いきいきと、とらえられている」と述べた後で、次のように書いている。

さらにまた、わたしは、いまだにわれわれの身辺に生きつづけている前近代的なものにたいして肉薄し、仮借するところなく、その病根をえぐりだしている、かれのあざやかな執刀ぶりに脱帽した。ゆたかな民俗学的な知識を縦横に駆使しながら、かれは日本および日本人のいかなるものであるかを、手にとるように、われわれにむかって示しているのである。つまり、一言にしていえば、『安吾捕物帖』のネライは、日本の伝統との対決にあるのだ。

「病根をえぐりだしている」という指摘や「日本の伝統との対決」という評価の妥当性については、ここでは保留しておこう。本稿では、「ゆたかな民俗学的な知識を縦横に駆使しながら」「日本および日本人のいかなるものであるか」を示している、という指摘に促されて、『安吾捕物帖』の世界の一端を明らかにしたい。

四

結城新十郎を始めとするレギュラー・メンバーが東京に在住しているために、当然のことながら、東京を舞台にした話が圧倒的に多いが、地方を舞台にした話や、事件の発端や因縁が地方にある話もかなりある。

それらを上げておくと、川越の旧家を舞台にしている第七話「石の下」、事件は東京で起こるが、発端は八ケ嶽山麓の土地の者から生き神様と崇拝されている名家の後嗣問題となっている第九話「覆面屋敷」、丹沢山中が主要舞台で、小田原も出て来る第十二話「愚妖」、事件は東京で起こるが、昔地方であった事件とからんでいる第十七話「狼大明神」である。

この四話の中で、「愚妖」を除いて、三話とも民間信仰や俗信が素材として盛り込まれている点が注意を引くが、その中でも、第十七話「狼大明神」は、『安吾捕物帖』の中で、坂口の民俗学的領域に対する

興味や関心が最もよく表れた作品となっている。そこで、以下、「狼大明神」にしぼって考えてみよう。

少し長くなるが、話のあらすじを記して置いた方が便利だろう。

蛭川家は元々武蔵の国賀美郡の旧家だったが、十五年前、真弓が当主の時に、故郷を捨てて上京した。その時の事情は次のようだった。土地にはオーカミイナリの祠を祭る神主の一族がいて、大倭大根大神を祖神として大昔から続いていると称しているが、土地の者は邪教として相手にする者はほとんどいない。蛭川真弓は、オーカミイナリに残る古文書を借り受けるが、その夜火事のために焼失してしまう。それに憤慨したオーカミイナリの神主は蛭川に強談判するが、そのうち蛭川家の番頭今居定助が、オーカミイナリの先祖の古墳があったとされる場所で、神の矢に射ぬかれて死んでしまう。蛭川家が上京したのは、その三ケ月後のことだった。十五年の間に、真弓は蛭川商会を興して成功を収めたが、今は息子に実権を握られている。そして、十五年後に、蛭川真弓は神の矢に心臓を射ぬかれて殺されたのである。新十郎らは、賀美郡へと実地調査に出かけた。土地の古老から当時の話を聞き、いくつかの事実が判明した。定助が殺された二ケ月前に、蛭川家と並ぶ富豪加治家の土蔵から金箱が盗まれ、その時、門に神の矢が突き刺されていたこと、当主の景村は、それ以来、神のたたりを恐れてオーカミイナリの信者となって山に篭っていること、定助は、金箱を掘り出している最中に殺されたという噂があること、などである。新十郎らは、オーカミイナリの神主に会うべく山の中に入る。そこで、神主の作っている矢が一本なくなっていることを発見する。また、景村と話した結果、定助の子供の伊之吉が山にいることを知り、会いに行く。伊之吉からは、父親が殺された時の記憶などを聞いた。事件の概要を察知した新十郎は、再び伊之吉を訪れるが、彼はすでに立ち去っていて、手紙を残していた。手紙と新十郎の推理を総合すると、十五年前の土蔵破りは、真弓と定助の犯行で、定助を殺したのは真弓、伊之吉は、たまたま聞いた景村の話からそれを推測して、十五年後に真弓を殺して恨みをはらしたのだった。

以上のあらすじからわかるように、「狼大明神」は、神のたたりを隠れ蓑にして行われる犯罪が描かれている。推理小説的な側面から見れば、土蔵破りと定助殺しの犯人、真弓殺しの犯人と、それぞれの犯行の動機や手口は、新十郎によって明らかにされて、犯罪に関する謎は解き明かされる。しかし、犯罪の背景となっている謎、オーカミイナリとは一体何かということに関しては、新十郎によっても、また、作品の語り手によっても明らかにされることはない。

犯行の謎解きに推理小説の主眼があると考えれば、オーカミイナリの謎は、作品の中では副次的な意味しか持たず、せいぜい話の興趣を盛り上げる役割を担っているだけだと受け止められかねないだろう。しかし、そうではない。関井光男氏も言うように、「坂口安吾の関心は推理に至る状況、狼大明神への追求に貫かれている」（『坂口安吾全集』第十一巻　「解題」）のであって、それは、話の興趣を盛り上げるという役割を越えてしまっている。

では、オーカミイナリとは何か。次に、オーカミイナリとは何かという謎について考えてみよう。

五

オーカミイナリが実在しないことは、言うまでもないが、話の舞台となっている埼玉県賀美郡(明治二七年に那珂郡と併せて児玉郡となる)とその近辺の歴史や神社に関する古伝は事実を踏まえている。坂口は、昭和二九年二月に桐生に転居して以来、近辺の古墳めぐりを開始するが、桐生市と埼玉県児玉郡はすぐ近くで、郡内にはいくつか古墳もあり、訪れた可能性がある。ちなみに、定助に殺される蛭川の姓は、児玉郡内の地名から採ったものと考えられる。

オーカミイナリが「稲荷」を称している根拠は、話の中で明らかにされていない。オーカミイナリの所持する古文書によると、山奥の祠を守る一族は、神代から連綿と続いていることになっているが、土地の古老の話によると、たかだか七八十年前から住み着いたに過ぎないということだから、土地の人々からは、一種の新興宗教とみなされていることになる。従って、オーカミイナリの由来について詳しく書き込む必要はなかったはずなのだが、次のように、坂口は、ありもしない祖神の名前まで作って、それらしい由来をでっち上げている。

彼の先祖は大倭大根大神という神で、日本全体の国王であったが戦い敗れて一族を従えてこの地に逃げ住んだ。ところが後世に至って、臣下の子孫が児玉党、丹党、猪俣党などを称し、総家たる大加美神社を焼き払い、神たる人の子孫を追った。神の子孫は若干の古文書だけからくもフトコロに、少数の従者をしたがえて山の中に逃げ込んだ。それがオーカミイナリである。

長い歴史のうちに少数の従者すらも離れて里へ降りてしまい、神の子孫だけが山奥に残って小さなイナリのホコラをまもり、太古からの祭りの風を伝えているという。

これが歴史的に何の根拠もないでたらめの由来であることは言うまでもない。大倭大根大神はいかなる史書にも表れない架空の神名であり、武蔵七党は武蔵国の守や介が土着したものの子孫と考えられているから、大倭大根大神の臣下の子孫ということもあり得ないだろう。

この由来には、恐らく、各地に残る平家落人伝説や木地屋の所持したという木地屋文書などのパターンが組み込まれていると考えられるが、オーカミイナリの祠をまつっている一族が、かつて日本全体の国王で、戦いに敗れて、山の中に逃げ込んだ一族の末裔であるという、この由来のアウトラインに注目すれば、そこには、柳田国男の山人＝先住民説が混入している可能性も考えられるのである。

柳田国男の山人＝先住民説については詳しく述べる必要はないだろう。よく知られているように、柳田国男は、民俗学の出発期に〈山人〉の研究に重点を置いていた。柳田は、『山の人生』(大一五・一一)を転換点として、〈山人〉の研究から〈里人〉(＝常民)の研究へと重点移動することになるのだが、『山の人生』に収録されている「山人考」(大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿)の中では、「自分の推測としては、上古史上の国津神が末二つに分れ、大半は里に下って常民に混同し、残りは山に入りまたは山に留まって、山人と呼ばれたと見る」と言っている。つまり、柳田は、一時期、〈山人〉とは、天孫族によって山の中に追いやられた先住民(＝国津神)の末裔であると考えていたのである。

断わるまでもないことだが、ここで、坂口が、柳田の山人＝先住民

説を信じていたということを言いたいのではない。坂口が柳田の山人研究を読んでいたという確証もない以上、それは、憶測の上に憶測を重ねるようなものだろう。しかし、オーカミイナリを祭る一族の顔を、次のように描いていることを考えれば、坂口が、この一族に〈山人〉のイメージを与えていることは確実のように思われる。

彼ら(新十郎ら—引用者注)は神主に対面して、おどろいた。なるほど、まったく天狗の顔である。お面の天狗ほど長い鼻ではないけれども、剣客シラノどころの鼻ではない。そして、これを典型的な金ツボ眼というのであろうが、二ツの円い噴火口のようなクボミが並んで、その奥に円い目玉がギラギラ光っている。顔の色はたしかに渋紙の色にちかかった。

ところで、オーカミイナリの一族に〈山人〉のイメージが入り込んでいると指摘したが、柳田国男の言う〈山人〉そのものというわけではない。赤坂憲雄氏は、『山の精神史　柳田国男の発生』(一九九一・二〇　小学館)の中で、柳田が、〈山人〉という語と〈山民〉という語を厳格に峻別して使用していたことを指摘している。すなわち、〈山人〉とは、山男山女・山童山姫・山丈山姥などの「山中を漂泊する異形異類のモノたち」であり、〈山民〉とは、「山中に定住的生活(イエと村落)をいとなみ、狩猟や焼畑を生業とする山の民」のことである。この概念規定から考えると、オーカミイナリの一族は、どうやら〈山人〉にも〈山民〉のどちらにも属さない、ということになる。では、彼らは一体何者なのだろうか。それを考えるために、オーカミイナリの信者についても見ておく必要がある。

オーカミイナリの祠の近くには、十いくつかの「掘立小屋」があり、そこには、オーカミイナリの信者が住み着いている。家の門に神の矢の立った加治景村や、神の矢で射ころされた今居定助の息子の伊之吉らも、これらの小屋に住んでいる。新十郎らの一行は、加治景村の小屋を訪ねて、話を聞くが、その中で、景村はこんなことを語っている。

小屋の住人は全部といってよろしいほど近隣の里から山へあがってきた人です。そして参詣者は元来が山を住居としている人ですね。山へきても定着するのは、里の人の習慣ですよ。小屋の住人はたいがい児玉郡の百姓だった人たちです。

つまり、オーカミイナリの信者のほとんどは、山の漂泊民なのである。また、伊之吉が、新十郎たちに残した、犯行を自供した手紙の中には、次のような一節がある。

私は彼を殺したことが悪いこととは思いませんので、山人とともにここを去り、永久に山から山に移り住んで一生を終ります。たぶん私を捕えることは不可能でしょう。なぜなら、ある種の人間にとっては山は無限の隠れ家だからです。伊之吉より

ここには、「山人」ということばが出ているが、既に見たように、この「山人」は、柳田的な意味での〈山人〉ではない。ここに言う「山人」とは、「サンカ」という名称で呼ばれる山の漂泊民のことだと考えるのが最も自然である。と言うよりも、「狼大明神」で、坂口は、オーカミイナリの一族とその信者(小屋の住人を除いて)について、サンカを暗示するように描いている。

サンカについては、現在でもその実態は解明されていない。そういう名称で呼ばれる集団が消滅してしまった以上、この先もっと解明されにくくなっていくのかも知れない。

さんか　現代まで定住することなく、山間水辺を漂泊する特殊民群の代表的なるもの。ミツクリ・ミナホシ・オゲ・ポンなどとも言う。西は九州から中国山脈、近畿中部から東は関東地方にも分布している。単純な生活様式で、セブリと称する仮小屋または天幕によつて転転と移動し、男は泥亀・鰻などの川魚を捕えて売り、女は笊・篭・筬・箕などの竹細工をする。これらによつて山農村と多少の交渉をもつている。

柳田国男監修・民俗学研究所編『民俗学辞典』（一九五一・一　東京堂）の中の解説である。この部分に続いて、各地のサンカの呼称や実態の記述があり、最後にサンカの名称の由来やサンカの前身に関しての推測を記して、解説を終えている。辞典の記述としては当然のことながら、一般に流布しているサンカの虚像的な部分の記述は一切避けられている。

坂口安吾が、サンカの実態について、どの程度の知識を持っていたのかは不明だが、「狼大明神」の中の山の漂泊民の記述は、一般に流布しているサンカの虚像的な部分をもとにしていると考えられる。先に述べたように、サンカの実態については、現在でも不明な部分が多く、何が実像で、何が虚像かは判別しがたい。ましてや、現在よりももっとサンカについての研究が進んでいなかった『安吾捕物帖』の執筆時点では、サンカの虚像的な部分が作品の中に取り込まれたとしても、それは仕方ないことだったと言うべきだろう。

まず、サンカと犯罪の関わりについての虚像的な部分。サンカを一種の犯罪集団と見なす見方は一般に強くあったようで、柳田国男の「『イタカ』及び『サンカ』」（明四四・九～四五・二）が警察署長の談話をもとに書かれ、後に「山窩小説家」「山窩研究家」となる三角寛がサンカに興味を抱くきっかけになったのが、説教強盗事件の取材だったという事実は、そのことをよく示しているだろう。

「狼大明神」では、先に引用した伊之吉の手紙の中の一節に、「ある種の人間にとっては山は無限の隠れ家だからです」とあり、一種の犯罪集団のネットワークの存在を暗示している。ついでに触れて置けば、第十三話「幻の塔」では、人殺しと牢破りの凶状持ちの大工が出て来て、彼は、山中をうろついた後に、「箕作りのベク助」と自称するようになる。ここでも、捕縛の手から逃げるために、犯罪者がサンカ集団に紛れ込んだことを暗示しているのである。なお、犯罪者がサンカの集団の中に紛れ込む例は実際にあったようで、三角寛によると、「サンカにまぎれこんで悪事を働く一味」を「マガクレ」と生粋のサンカは言っていた（『山窩物語』〈一九六六・一　読売新聞社〉）という。

次に、宗教行為と犯罪が結び付いた虚像的な部分。柳田国男の「『イタカ』及び『サンカ』」では、大垣警察署長広瀬寿太郎から聞いたこととして、サンカに「セブリ」「ジリョウジ」「ブリウチ」「アガリ」の四種類があることを記している。「セブリ」は、『民俗学辞典』の解説にもあったように、箕作りなどの竹細工を生業とする集団で、数の上で最も多い。「ジリョウジ」「ブリウチ」は、神仏に仮託して詐欺行為を行う集団、「アガリ」は神仏によらないで詐欺行為を行う集団で、三者とも最初の計画が失敗すれば、破壊窃盗をなす、という。

「狼大明神」では、オーカミイナリの神主は、詐欺行為を働いている形跡はなく、「ジリョウジ」「ブリウチ」と直接結び付いてくる可

能性は薄い。

最後に、山中歩行術に関する虚像。「狼大明神」の中では、オーカミイナリの神主は、「彼が山中を走る時は狼のように、物凄い速さであると言われております」と里人から噂されていることになっている。また、オーカミイナリの信者たちの参詣の様子は、「峯から峯を伝ってくる人、そして、里の人には姿を見せない参詣人が多いのですよ。……(中略)……日中はあまり姿を見ません。暗くなるころ到着して、明け方には立ち去ってしまうのです」と書かれている。

三角寛によると、サンカの男子は十三才になると丹波に行って、「ミシリ」という修練を行うことになっており、そこでは「タカツコリ(走法)」や「ヤミツコリ(暗行法)」などの武技などを学ぶという。また、サンカの走り方に、「転場(てんば)、場越(ばこし)、駈足(かけまく)、疾駆(おおのり)」などがあって、「『かけまく』と号令されたら一せいに駈足に」なり、「一日に四十里(約一六〇キロ)ぐらいは平気だという」(『山窩物語』)のである。

彼らの山中の歩行や走行が、通常人よりも優れていたことは確かだろうが、これらのことが、どの程度事実なのかは、やはり不明である。ただ、こうした山中の歩行術に関する虚像が、人々に、サンカ＝〈山人〉イメージを抱かせたことは確実で、坂口が伊之吉の手紙の中で、彼らを「山人」と呼んでいることも、ここらに起因しているだろう。

六

さて、以上見てきたように、オーカミイナリの一族とその信者には、サンカ＝〈山人〉のイメージが与えられている。先に述べたように、このことは、「狼大明神」の推理小説的な要素には直接関わってこない。勿論、このように謎めいた集団を出すことによって、舞台効果を盛り上げるという意味はあったろう。それは、坂口が、「サンカ」を暗示しながら、「サンカ」という語を一切使っていないということからも伺い知れる。それによって、話の謎めいた感じは一層深まるわけである。しかし、『安吾捕物帖』から坂口の固有の関心を引き出すという観点から言えば、このことは、やはり舞台効果を超えた意味を持っている。なぜならば、それは、坂口の〈山〉に対する強い関心とつながっているからである。

加治景村と伊之吉は、もと〈里人〉であったが、今はオーカミイナリの祠のある山中で暮らしている。景村は、「私は世をすててここに住み、心の安静を得たようです」と語り、伊之吉は、新十郎からここに住むようになった理由を訊かれて、「里の暮しがイヤになったからですよ」と答えている。彼らは、神のたたりにあった家の者として〈里〉に住みにくくなって、山の中に逃げ込んだわけだが、その他にも十数人の者が、何らかの事情で〈里〉に住みにくくなって、この山中に暮らしているのである。

ここで思い出してよいのは、柳田国男の『山の人生』である。柳田は、その中で、「何の頼むところもない弱い人間の、ただいかにしても以前の群とともにおられぬ者には、死ぬか今一つは山に入るという方法しかなかった」と書き、「跡の少しも残らぬ遁世」は「後世の我々にこそこれは珍しいが、実は昔は普通の生存の一様式であった」と書いて、さらに次のように述べている。

それだけならよいが、人にはなおこれという理由がなくてふらふらと山に入って行く癖のようなものがあった。少なくとも今日の学問と推理だけでは説明することのできぬ人間の消滅、ことにはこの世の執着の多そうな若い人たちが、突如として山野に紛れ込んでしまって、何をしているかも知れなくなることがあった。自分がこの小さな書物で説いてみたいと思うのは主としてこうした方面の出来事である。

『山の人生』が、柳田国男の「日本人における山の精神史の掘り起こしの試み」(赤坂憲雄)の書であることを、この部分はよく示しているだろう。

坂口安吾は、昭和十四年八月に「日本の山と文学」というエッセイを発表している。そこで、坂口は、「登山」という西洋流の観念が入って来る以前の、祖先の山に対する観念や感情について語っている。「それは、恐怖の対象であり、転じて崇敬の対象であった」と坂口は書く。このエッセイは、この時点での坂口の民俗学的な知見の摂取ぶりを示すものとして重要だが、「登山になれた我々の感情によって、祖先達の山の感情を忖度することはできない」とか「今日山の『感傷』は西洋の文化と感情が移入されるまで、祖先達になかった」というように、西洋流の観念が入り込む以前の日本人の山に対する感情を探ろうとしている姿勢は、注目に値する。分量的には短いが、坂口の「日本人における山の精神史の掘り起こしの試み」とも言えるエッセイである。

こうした坂口の山に対する関心は、よく知られた小説では、「桜の森の満開の下」(昭二二・六)などにも表れている。しかし、「桜の森の満開の下」では、そこに登場する山賊が自意識家として描かれていることや、小説の枠組みが幻想譚となっていることなど、西洋流の山の観念が入り込む以前の日本人の山に対する感情というには、余りに近代的な感情が紛れ込みすぎていると言わざるを得ない。

その点、「狼大明神」は、「桜の森の満開の下」に比べて、小説的な結晶度は明らかに劣るが、なまじいな幻想性が排除されているために、却って、山の中へ逃げ込み、そこを住処としている人間の不思議をリアルに伝える作品となっているのである。

七

ここまで、『安吾捕物帖』の中でも、時代背景となっている明治開化期の世相風俗に関わらない話に注目してきた。その意味で、本稿は、『安吾捕物帖』の一側面にしか照明を当てていないことになる。最後に、ここまで明らかにしてきたことと、『安吾捕物帖』の世界全体との接点について、考えてみたい。

浅子逸男氏は、「貧民窟と舞踏会 ―『明治開化 安吾捕物帖』について― 」(久保田芳太郎・矢島道弘編『坂口安吾研究講座Ⅲ』 一九八七・一二 三弥井書店)の中で、『安吾捕物帖』では四つの層が射程におかれているとして、「伊藤博文邸の仮装舞踏会に象徴される上流」「寄席や各種の縁日に集まる一般の人々から成る層」「鮫河橋のように古い沿革を持ち江戸時代までさかのぼれる下層階級」「同じ下層といっても明治になってからできあがってきた新興の場末の層」を上げている。これは、『安吾捕物帖』を都市小説として見た場合にそ

うなるのであって、ここまで見てきたように、『安吾捕物帖』には、東京という都市を越えて、また、明治開化期の世相風俗をも越えた世界が描かれていて、とうてい四つの層に収まりきるものではない。

ここでは、『安吾捕物帖』に描かれている全ての階層にわたって考えることはできないので、その中でも特徴的なことに関してのみ見てみたい。

『安吾捕物帖』には、華族から貧民に至るまでの、上層から下層に至るさまざまの階層・職業の人物が登場するが、農民だけは出て来ない。このことは、『安吾捕物帖』の各話がほとんど東京を舞台にしていることに起因しているが、先に見たように、田舎を主な舞台にしたり、事件の発端・因縁が田舎にある話が四話ほどあり、それにもかかわらず、そこでも農民は出て来ないのである。

丹沢山中を主要舞台とする第十二話「愚妖」には、農民らしき人物が出て来る。しかし、ここに出て来るのも純然たる農民とは言えず、「ナガレ目」というあだ名の男は、炭焼きをしながら桧の盗伐や女の買付けの斡旋などをしているし、「オタツ」「カモ七」の夫婦は、村里から離れた山の中で生活している。ともに、村人から嫌われ孤立している人物で、いわゆる「常民」というのとはかけ離れている。

もう一つは、被差別部落民が、第十一話「稲妻は見たり」と第十五話「赤罠」の二話に出て来ることである。「稲妻は見たり」では、オソノという「女中」の実家が車善七の流れをくむ「代々非人頭」の家となっており、オソノの同僚三枝子の兄頼重太郎は高潔な部落解放運動家であるという設定になっている。「赤罠」では、トビの頭コマ五郎が、被差別部落を統率する首長ということになっている。現在の我々の眼からすると、差別問題に対する無神経な記述と思われるような部分もあったりするのだが、部落解放運動とキリスト教の関わりなど、坂口は被差別部落の実態をある程度知った上で書いているような節がある。

それから、今のことと関わって来るが、身体的なハンディキャップを負った人物がたくさん出て来ることである。もういちいち上げることはしないが、「盲人」だけを取り上げても、第四話「ああ無情」のヤスの母、第八話「時計館の秘密」の貧民窟に住むお久美、第十六話「家族は六人・目一ツ半」の「アンマ」などである。

以上のように、『安吾捕物帖』には、山中の漂泊民や被差別部落民、身体的なハンディキャップを負った者たちといった、非「常民」的な人間たち、抑圧された者たち、社会的な弱者、つまりは、周縁的な人間たちが数多く登場する。このことは、近代の知的エリートからはずれたコースを歩んだ坂口の作家としての位置と多分に関わりを持つものと推測されるが、同時に、彼の歴史観を色濃く投影しているものと思われる。

彼の歴史観は、『安吾捕物帖』と並行して書かれた『安吾新日本地理』によく表れている。坂口のルポルタージュの問題は別の機会に論じてみたいが、『安吾新日本地理』で、坂口は、正統的な歴史によって隠蔽され抹殺された者たちの歴史を掘り起こそうとしている(「飛騨・高山の抹殺」「高麗神社の祭の笛」など)。このような彼の歴史への視点は、突然の死によって中断させられた『安吾新日本風土記』によって、もっと深められ発展させられるはずのものであった。

推理小説として書かれた『安吾捕物帖』に、彼の歴史観が直接的に

表れていないことは、言うまでもない。そこには、推理小説という形式の限界があった。しかし、既に触れたように、推理小説という形式だからこそ、坂口安吾は、自己の固有の関心や興味を作品に盛り込むことが可能だったということは確実にあった。坂口は、体系的に学問を積んでそれを作品に生かすというタイプの作家ではないが、『安吾捕物帖』は、民俗学を始めとして様々の歴史書や歴史資料に当たった形跡（それは『安吾捕物帖』の執筆のためだけではなかったろうが）が認められ、彼の勉強ぶりがあらわに小説に投影した、彼の小説の中では特異な作品となっている。

そうした坂口の勉強の成果が、果して、その先どういう形の具体的な小説作品となって表れる可能性があったのかは確定できない。彼が、『安吾新日本地理』から『安吾新日本風土記』へと続くルポルタージュの試みの延長線上に、安吾流の「日本歴史」をまとめる構想を持っていたことは知られている。坂口の勉強は、小説よりも、その方の実現を目指すためのものだったと考えることもできる。しかし、彼の民俗学的な領域への関心の深まりは、単に「日本歴史」の構想にだけ収斂されるはずのものではなかった。これまで見てきたように、『安吾捕物帖』は、そうした坂口の関心が、小説の中に取り込まれた唯一の例と見ることができる。それが、推理小説という形式でしか実現されなかったことは、坂口安吾の作家的な限界を示しているとも言える。しかし、同時に、『安吾捕物帖』の試みは、その先に書き得たかも知れない独自の小説の可能性を暗示している、と私は考えたいのである。

○坂口安吾の文章の引用は、「日本の山と文学」（「ユリイカ」一九八六年一〇月号　所収）を除いて、すべて『定本坂口安吾全集』（一九六七・二～七一・一二　冬樹社）の本文に依った。

○サンカについては、本文に上げた文献の他に、次の文献を参照した。

・宮本常一『山に生きる人々〈日本民衆史2〉』（一九六四・一　未来社）

・三角　寛『サンカの社会』（一九六五・一一　朝日新聞社）

・田中勝也『サンカ研究』（一九八七・二　新泉社）

・礫川全次『サンカと説教強盗』（一九九二・六　批評社）